

服部躬治の思出（七）より

川浪 嚴根

八 水野仙子集に就て

妻が亡くなつてから、私はその遺作をまとめて出版してやりたいと思つて、原稿の整理にかゝつた。揃はないものは、圖書館に通つたり、新聞の消息欄に頼んだりして、殆んど全部を集めたが、相當の苦心を要した。故人は自分の書いた物を大事に揃へて置くといふやうなことを几帳面にしなかつたが、これは將來に期待するところが大きかつた爲だと思はれる。

兎も角も大體まとまつたので、一二の書店に交渉したが、素より中道にして斃れた地味な女流の作物など、全集として出版してくれるところなど無かつた。最後に有島武郎氏の紹介で、叢文閣から選集を一冊出して貰ふことになつた。その内容は、有島氏が麴町の自邸に、故人の恩師田山花袋氏と、叢文閣の主

人足助素一氏にも寄つて頂いて決めようと言はれるので、それに従つた。

足助氏は、有島氏とは札幌農學校時代からの舊友で、特別の間柄であつたやうである。有島氏の作物も、叢文閣からばかり出版されてゐた。その關係からでもあらうが、足助氏はあまり商賣になりさうもない出版を引受けてくれたのであつた。

氏は普通の商賣人と違つた、奇骨のある人であつたと思ふが、一面非常に神経質で怒りつぽかつた。私は校正のことか何かで、ひどく機嫌を損じられたことがある。さうして氏は仙子集の出版を、もう取りやめようとして極言した。私も少し侮辱を感じたので、やめようと決心した。しかし足助氏はどう思つたか、急にまた氣持を取り直して笑つたりしたので、そのまゝになつた。

—— 以下、略 ——